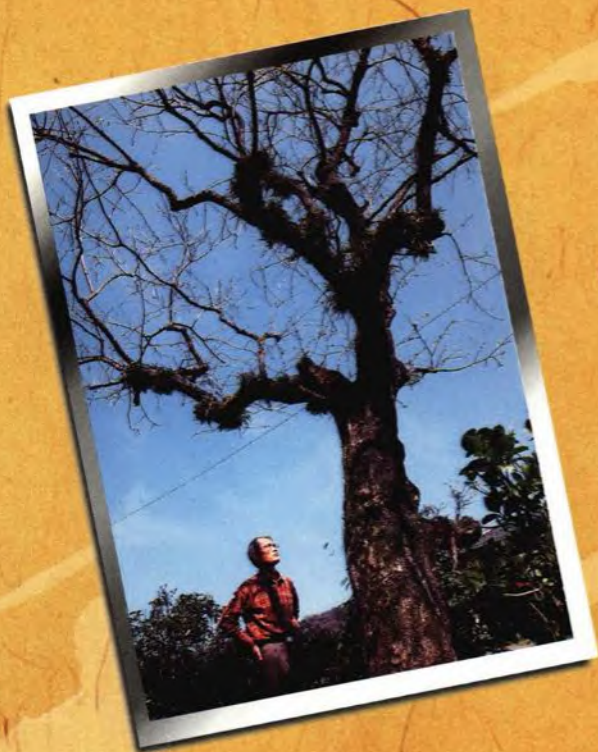


柿ノ木のうた

森山盛桜川柳集



森山盛桜川柳集

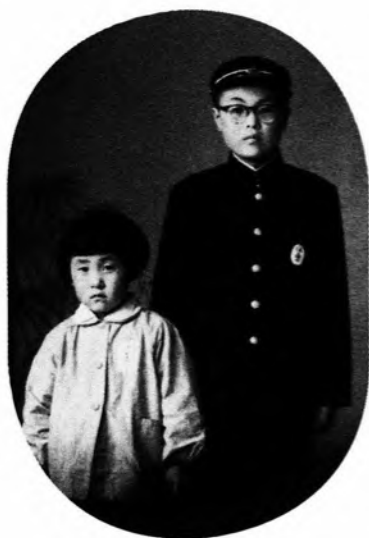
柿ノ木のうた

柿ノ木のうた

はじめに

川柳を始めて三十五年になる。飽き性にしては、よく続いていると思う。新聞柳壇を見ていて、「これなら僕にも出来る！」と突然思い立って応募した。知識は全くゼロであったが、たまたま入選したのが続けるきっかけとなった。あの時没になっていたら、そこで止めていたと思う。きっかけというのはそんなものだと思う。一時期は高尚な句に憧れた時もあり、それらしい句も残しているが、近年は川柳の本質である人情の機微が詠めたらと思っている。

句集を出す事など考えてもいなかったが、妻と娘の奨めもあってその氣になった。一番の目的は、家族に読んでもらう事なので、内容もそのように考えたつもりである。従って序文・跋文はどなたにもお願いしていない。



中学1年の5月5日
妹 祐子と



生後6ヶ月の正月
母 ミツエと



高校3年の体育祭
「クレオパトラ」の衛兵役



高校2年の修学
旅行(長崎)



中国研修生の家庭訪問
(山東省煙台)



大学4回生
少林寺拳法部

妻と退職記念旅行(長崎)



川柳塔鹿野みか月記念大会
(平成二十三年十二月)



中国雲南省の石林

昭和五十二年四月六日 日本海新聞柳壇

合格の祝い晩酌やめて買い

現実には有り得ない状況
かもしれないが、何はとも
あれ生まれて初めて世に出
た川柳であつた。

昭和五十二年（昭和五十五年）

誕生日また来たのかと歳かぞえ

帰省して波の白さが目にまぶし

野菜だけ残し満腹叱られる

気が急いたビール泡だけ飲まされる

内職がはずむか母の機嫌よさ

風向きが変わり無心を言い出せず

含みある医師の口調が気にかかり

母の日に父うきうきと酒を飲む

看護婦の妻マニキュアのない化粧

嘘だとは言えず無邪気な目に負ける

現実が夢をだんだん消して行く

湯気寒しだあれもない露天風呂

参観日待つのは出来が良い子だけ

出勤の妻せかせかと朝きざむ

空箱の不運子猫と流される

小心がチャンス握ったまま果てる

職のない身に広すぎる青畳

不仕合わせだとは障子の影見えす

言い逃れしたネクタイの首重い

弱いとこばかりを狙う風当り

酔いざめの水で天下が又終わり

壁の穴隠す鏡に落ちぶれる

前だけを飾る虚勢に背が寒い

挫折した闘志は夢として残し

愛欲しい電話空しいコール音

落ち着きと見られ横着頼られる

知恵袋みんなはたいした正念場

雲つかむ話に合わす生返事

嘘ついた日の心臓にある産毛

失意から得た陽気さがたくましい

エンピツが忘れる文字が多くなる

盃を置いて口論する構え

本音みな吐いて男が軽くなり

芽が出ずにくる来年が早すぎる

優しさも怖さも知って海ゆたか

名花ゆえその散りぎわを考える

世にすねたいチゴは白いままでいる

一輪を活けるに今朝の角度選る

ご先祖の誰からあとの血か不思議

昭和五十六年～昭和六十年

貧乏を恥じる気はない朝のお茶

山陰の男無口を誇りとす

ひとの言うその幸せに向いてみる

ちちははの運も不運も聞いてない

自画像はどこから見てもおめでたい

本能のように美辞麗句を備え

告げ口をしそうな男には見えぬ

つぶての機狙い路傍の石でいる

へつらいを横目に無口ただ励み

生き延びる手段へ影を準備する

くしゃみして男空想から醒める

亀の背を叩くみぞれが自戒する

改札の群れにわたしの足もある

会議室出ると素顔を取り戻し

善人が掴む虚空はたんとある

合図待つ踊る悲しい猿である

不器用な手だ祈るにも暇が要る

サイコロの転がり方が気に入らぬ

歩の群れにいて矢面に立たされる

マンネリの影へ覚えた自己嫌悪

針の耳もうあれこれと迷わない

用心の盲点を突くすきま風

スクラムが葬り去った浪花節

ハエ追ってなんと平和な八月よ

ロボットに学ぶと心まで冷える

カミソリの頭上からでも熟れてやる

溺れないほどの犬掻きなら出来る

雑踏の風もやっぱり野に戻り

息切れと母の日記に書いてない

春霞悪事は他人事のように

幸せの色を木洩れ日からもらう

ハンカチで拭ける程度の汗は掻く

雨だれは僕の一瞬かも知れぬ

昭和六十一年～昭和六十四年

大切な人と他愛のない話

どの指も届かぬ背なの痒いところ

言い訳はシャワーを浴びてからにする

それぞれの火種を抱いて人と人

女割る男半端がいつも出る

日めくりの軽さは夢のない証拠

暗闇に有つてコケシは騒がない

一心に洗うきのうの手の汚れ

過ちを小指あたりにたたみ込む

ストーブの赤さは人を裏切らぬ

石蹴ったまま挨拶をし忘れる

一億のあなたも中の上ですか

吊り革に抜け殻らしくぶらさがる

愛知った日のポケットはすでに春

掃き寄せた破片がボクの顔になる

おぼろ月キザな男を演じ切る

立ち尽くす身に速すぎる自動ドア

平仮名のひとことなのに解しかねる

気がつけばかちかち山の荷を背負い

まっすぐな道には甘い水がある

芋虫の謀反ますます丸くなる

どれほどの未来か卵まだ迷う

拾われて無縁仏に添った石

野良という肩書きを持つ犬と猫

あっぱれの裏は詰め腹切っただけ

冷たさの限界線で出す気品

秋の陽の早さ錠剤飲み切れぬ

返答に困って耳の穴を搔く

善人の個性小旗の群れに無い

スピーチがチクリチクリと刺してくる

それからの日本は知らぬミコトたち

墓を洗ったらちよつぴり気が晴れた

人の世は波のしぶきに似て哀れ

さざ波の噂がこわいゆりかもめ

天を突くところで摘まれたつくしんぼ

巣を落ちたつばめ九死を超えている

窓際の酒は意外とうまかった

背信の背なを雨脚追ってくる

後戻りして吐き捨てた語を拾う

飲ます気はないが煮え湯になってきた

孔の意味何だ五円と五十円

生真面目なメトロノームで味気ない

売る方も高いと思う松葉蟹

のどぼとけ小骨一つに泣かされる

野辺の花だれを裏切る訳でなし

平成元年～平成五年

幸せはここに六十ワットの灯

起上がりこぼしがたくましく見える

桜咲くまでに和解をしておこう

居眠りをしてると巢から落とされる

衣紋掛け野心はどこにぶら下げる

論客の酒が理屈になってくる

起きて恩寝て恩みんな有難い

ゆりかごに乗れたら幸せと思う

ひたむきな足跡がある石畳

人間のみなさま檻の外いかが

正論の順に島流しにされる

試し切りされる運命の竹だった

指切りを休み過ぎたと思う指

プロポーズしたのかバラの枝がない

人情がこぼれぬ内に乾杯を

おさげ髪少女に似合わなくなった

双葉からつながっていた縁だった

押し花も日記も恋にしてしまう

さむらいが頭を下げてやってきた

鍵穴の中で小回り効かすだけ

二枚目の舌を消毒しています

嗚呼母よ爪の垢までたくましい

五十音どこかに亡母の声がある

どの道もお地藏様に突き当たる

畦に種蒔いてアピールしておこう

地下足袋の足跡分はボクの土地

節穴の位置がわたしの目の高さ

疑問文ばかりあなたに書いてます

熟睡の奥に虚像が続くのみ

朝が来たまた人間を続けよう

靴底と付き合うだけの足の裏

五時までの胃痛は他人に悟らせぬ

市民一二三だんだん声になる

頼りない洗濯ばさみ又落ちた

下馬評の二重丸には逆らえぬ

核心をそらす愉快的話する

セ氏零度あたりに血潮とどこおる

野仏に似たいと思う鬼瓦

常夜灯さえもまぶしい影法師

吊り橋を渡ってからの話です

世を叱る頸動脈が浮いてくる

月曜の足音聞いて吞んでいる

手帳には書けない予定だつてある

コーヒーにとりと落ちてさようなら

ぬかるみが遮二無二春を主張する

平成六年（平成十年）

人生のどこかで区間賞を取る

芸のないハンカチこれは男物

ふらふらとしてるが一徹なクラゲ

とつくりの首が一番つかみよい

てっぺんのつむじ中々お辞儀せぬ

一合で歌える術が身についた

流れが止まった梯子を踏み外す

簡単に樞の釘を打ちすぎる

見くびるな昨日のむくろではないぞ

葛藤が袂紗をたたむまで続く

折々の疵軒先にぶら下げる

五月雨に午後の無聊が強くなる

地球儀の線を勝手に変えたがる

笠の中殺気を計りかねている

一本の杭が野原を狭くする

箱を裏返して知らぬ顔をする

ところてん母なる海を捨てきれぬ

かたつむり動くわたしもやり直す

板切れと木切れがけなしあっている

芯のある煙だまっすぐに昇る

転がれとばかりに坂が待っている

山脈を見るとあこがれ強くなる

新緑の中で死ぬこと生きること

墓に積まれて石ころでなくなつた

失恋の不覚ハンカチは桃色

赤い爪きのうをセピア色にする

弔いの最敬礼を崩さない

臆病な栗で最後に爆ぜてみる

やはり根は花物語とは無縁

ざくろの実みんな悪友らしい顔

饒舌の裏の本音を見定める

特別な轍でいつまでも消えぬ

七難を田の真ん中で避けている

天に済まぬがつり銭が多かった

日和見の草履ですぐに裏返る

天狗でもないのに鼻が伸びてきた

肩幅の精一杯で生きている

梅雨入りになって予定がはかどらぬ

朝も劇ゆうべも劇の日が過ぎる

単純な脱皮ばかりで伸びきれぬ

絵の中の一本道を歩きたい

悪いこと瓦がずれてから続く

豆かじりながらポツポツ喋ろうか

横着なうつつちやりばかり考える

樹の下に座して悟ってみたくなる

蕾から不平分子の色になる

出口へと急ぐ顔には覇気がない

勢いのある足跡について行く

見逃した三文判の底力

提灯を提げているのが狙われる

代理など一本杉は考えぬ

平成十一年～平成十五年

大胆な名のアホウドリほめてやる

呵責とは一円玉の重さなり

一瞬の役目に生きるオブラート

うかつにも声が黄色くなってきた

生きる術たぬき寝入りを旨とする

依怙地になって忙しくしてみせる

わくら葉の逆襲予想しなかった

良心があつて火薬に成りきれぬ

考えた果実あとから熟れてくる

人間の終わりを人間が囲む

歯ぎしりにレモンひとしずくを垂らす

守るものあって男の影は鬼

人よりもきつと木の実は生き延びる

日焼けした農耕民族の腕だ

万物の最下点から上を見る

満ちてくる月とおんなじ呼吸する

コーヒーはブラック先が読み切れぬ

人間のエゴが真つ赤な河にする

峠から夫婦は夫婦だと思ふ

あぜ道に立つと輝く父である

それぞれの艶父の皿母の皿

失ったものの縁日に買いに行く

四季の雲知らず足許ばかり見る

ブランコのここから僕は出直した

棘は棘あざみは穏やかに生きる

四角でも丸でも美しい袋

迷い込む二〇〇一年という森

目の先にあるガチガチの僕の道

散文にして性分を悟らせぬ

ざわめいてみても所詮はうさぎ小屋

狡猾に折られた鶴は受け取らぬ

宴から乱へ誘いが効いてきた

喝采に届かぬ影と心得る

うまい水飲んで新世紀を生きる

しずしずと出番を待っている番茶

卵だが早くも期待されている

梨の花白く明日は詫びに行く

たった一人で喜んだ縁の下

鞆から夢を小出しにして生きる

民という幸せがある蟹の足

ひとときの居眠りそれからのむくろ

まだやれる終着駅でまわれ右

お祓いのあとのお神酒を飲み過ぎた

裏木戸で下手なあいさつするでない

筋のいい右腕だけど酒臭い

冬は暇なので財布をあけてみる

人情はここにもあるぞ千鳥足

学校で習わぬことをしています

脇役は数え切れないほどやった

消毒が効き過ぎ花が育たない

まごついて浅いぬかるみから出れぬ

平成十六年～平成二十年

食べてない物があるのでまだ生きる

ゆつくりと老ければ老けたとは見えぬ

いわくある果物籠がやってきた

生あくびしてもプライドだけはある

月の下仕掛けた罨が丸見えだ

コンマからあとの話は解らない

死んだふりしているだけさ浮いたゴミ

頑張つて池になれるか水溜り

残照の中生きている事思う

親不孝ばかりがアルバムに残る

又ひとつ薬が増えたのは不覚

身じろぎもしないで悪事やり過ごす

粥食べているが戦に行くつもり

まだ使うつもりで折れた矢を洗う

てのひらに大波小波押し寄せる

能弁も無口も湯豆腐が似合う

世渡りが上手で渦の上に浮く

しぶしぶの涙で何も光らない

諭されてもう騒がない青い梅

仲間割れした風船が逸れて行く

人間が喜ぶ泳ぎ方をする

自信あるからご破算にしてもいい

腹立ちをおさえ歩幅を狭くする

終点のバスをとろとろ降りかける

たくさんの人だ味方もいるだろう

人文字が描ける仲間を持っている

足りぬ字を補い合える仲である

風景が変わる記憶はそのまま

担うものあって眠りが浅くなる

出し惜しみしたら情けにカビが出た

ゴミ漁るカラスに同化してしまう

旗印かすんで誰も寄って来ぬ

折りたたみ椅子が気性に合っている

ご主人が無職で猫も寝ておれぬ

因果とは言わずに運のせいにする

何はともあれお隣に頼み込む

ひっそりと乾杯僕だけのまつり

公式となるので一語ずつ喋る

落ちぶれた時のひとりが有難い

生きたくて拝む死にたくても拝む

唇をすぼめて悪い息を出す

半世紀過ぎたおやじのHB

脳みそが軽くて楽な首である

真っ先に賞味期限の欄を見る

古いなあ一円札を知っている

平成二十一年、平成二十四年

ごり押しにごもつともとは情けない

捨てる気はあるが面倒臭いだけ

本日の仕事は爪を切っただけ

幼稚園までは朗らかだったボク

筆順が解らないので字を崩す

姿見はかなり正直だと思う

境界が揉めているので花植える

お宝と信じて蔵にしまい込む

朝顔のしぼんだ先は読みにくい

台所あたり高波注意報

小父さんが遊んでいても絵にならぬ

ひるんだらなめくじなんかやつとれん

万策が尽きたら笑うしかないな

悲しくて梯子を降りる気にならぬ

見たい明日無いから眼鏡など掛けぬ

悪友を外して行くとボクひとり

着ても着ても着ても裸の王様

何をして来たか六十年の指

春が来るまではゆっくり雪を搔く

終焉は吹雪と決めた桜の芽

このまんまつかい棒で満足だ

天ぷらの衣で隠す絵空事

ストローの中だすいすい流れとこ

おしゃべりが好きな接木の上と下

たぎるもの抱き地下茎として生きる

足跡がたくさんだけどボクはシロ

動機など知らぬがツムジ左巻き

順番にこぶしを開け春がきた

手の届く梢は折らぬのが情け

生きる知恵あり聞く耳と聞かぬ耳

絶頂の顔には少し癖がある

疲労だけ残った実らない会話

健診の最後で一つ引っ掛かる

風船が割れたら意味のない空気

品格がないのでワインには合わぬ

当て馬にされたとやっと気がついた

途中から逃げたが自責点はゼロ

何者か分からぬとりあえず笑う

喋るのが億劫マスク掛けて出る

純だった学芸会に戻りたい

夜行性なので昼間はおとなしい

ティッシュほど行儀よければ嫌われぬ

柿ノ木よ僕はせいぜい六十五

亡父森山敬山（保男）の作品

昭和二十年代

川柳

短律

同情しうっかり乗った口車

井戸端は噂話の花が咲く

夕飯の不足うどんで間に合はす

今日も又きのうと同じかゆする

(病院にて)

オツと踏むまい蟻の行列

一仕事終えて車座になり

短歌

妻共に拓きて植えし梨の山

雪解け待てず登り来て見る

我が村に温泉脈のありという

エンヂンうなり掘削つゞく

俳句

あちこちの田の人影は麦を蒔く

早乙女やサイレン鳴りて腰のばし

刈り終へて案山子も共に帰路につく

秋まつり奉納角力あるという

過ぎし日を偲びつ今日の月見かな

おわりに

我が家の庭の真ん中に西条柿の木がある。樹齡は不明。物心がついた頃からでんと構えていて、毎年恩恵にあずかって来た。最近は少し弱って来たのか、時々ポトポトと枝を落とす事があるが、この木には愛着がある。

亡父の文芸活動の事は、ほとんど知らなかった。亡くなったあと、偶然見つけたノートの数ページから知った。敬山はもともと書道の名前らしい。亡父の足跡も残す事にした。

サラリーマン人生は、丁度四十年であつたが、こちらもよく続いたと思う。仕事の関係で、中国には何度も行つたが、万里の長城と兵馬俑抗には縁が無かつた。機会があればとは思っている。

職を辞して一年半。生活パターンにもようやく慣れてきた。最近が高齢化問題がよく出て来るが、とやかく言っても始まらない。前向きに考えれば、高齢者が輝く方法は、いくらでもある。川柳を友とし、野菜作りと釣りを活性剤にして暮らしている。

森 山 盛 桜

平成二十四年六月吉日

略歴

昭和二十二年生まれ

本名森山澄夫

雅号盛桜（せいおう）

昭和五十二年

日本海新聞に投稿

川柳を始める

昭和五十五年

飯田蚊眸氏、山下以草夫氏、中原諷人氏等とみか月

川柳会を創設

昭和六十年

大阪川柳塔社同人

平成八年

川柳塔鹿野みか月会長

平成二十三年

鳥取県川柳作家協会会長

森山盛桜川柳集 柿ノ木のうた

(非売品)

2012年 6 月 1 日発行

著 者 森 山 盛 桜

〒689-0423

鳥取市鹿野町中園180

電話0857-82-1491

印 刷 (有)タクミコーポレーション

〒680-0911

鳥取市千代水 1 丁目85

電話0857-24-6288

